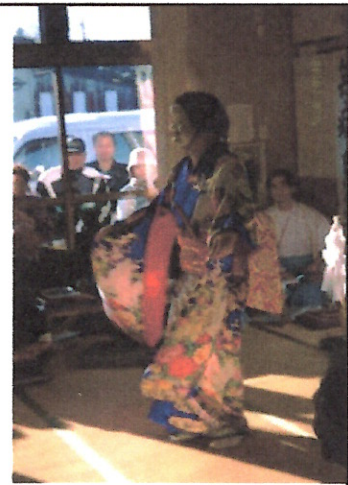


笑いの中の船戸おびしゃ



流山市鰯ヶ崎のおびしゃで使われた狐の立派な装束が個人蔵されている



④「おかめ踊り」。天の岩戸のアメノウズメノミコトは早変わり
⑤「三助踊り」。旦那と奴の後には大黒様や恵比寿様が従う

「おびしゃ」という、五穀豊穡を祈願した祭りが野田、流山、柏、市川という広範囲で行われている。漢字では奉射、奉社、備社とも書くが、本来は歩射（ぶしや）、馬に乘らないで弓を射る、そして禍厄を除去し、五穀の豊穡を占うという農村行事のようである。船戸で連綿と受け継がれているおびしゃの記録では、安政六年（一五八九）に「奉社」の字が当てられている。

寒風の吹く一月十四日の集会所・船戸会館のおびしゃは厳粛さと笑いに包まれていた。

五穀豊穡、無病息災と大書して天満宮の神を迎え、お祓いと祝詞奏上が終わると、お囃子が始まり、にぎやかに余興の幕が上がる。

まず「三助踊り」。かみしも姿の旦那に奴の三助が登場、氏子連中の酒盛りが始まっている中を行列が繰り出す。大黒・恵比寿の神様や高砂の老夫婦が続き、コミカルな三助のしぐさは氏子にも及ぶ。

続いては「三番叟」。女性一人が見事に踊り抜く。

最後は庄巻の「おかめ踊り」。五人のひよつとこを従えたアメノウズメノミコトが天の岩戸のまえで踊り狂う。ひよつとこはでっかい男根を持ち、それを派手にこすりながらおかめに突き当たり、卑猥さを突き抜け、大笑いの中で、百姓魂の強健さを浮かび上がらせる。

天満宮の氏子は百七十五人いるというが、お囃子も男女の出演者も素人ばかり、経費も出し合っているおびしゃらしい。地区外の見物人にも紅白の餅を配ってお祭り気分を盛り上げていた。おびしゃは、昭和五十八年頃まで逆井にもあった。いまでは、正月の単なる集まりになっているという。

